

オーストラリアン・ルールズ・フットボール

— グローバルな世界戦略とローカル・スポーツ —

藤川 隆男 (大阪大学大学院・文学研究科)

Australian Rules Football — Global Strategy and Local Sports —

FUJIKAWA Takao
(Graduate School of Letters, Osaka University)

今から30年以上前、オーストラリア国立大学に留学していた時に、倒産してしまいましたが、アンセツトという会社の長距離バスに乗って、ヴィクトリアとニューサウスウェールズの州境を越えたことがあります。長距離バスの運転手さんが、運転手兼バスガイドさんでしたが、この川（マリー川）の北と南では、大きな文化の違いがある。南にはクラブを中心とした文化が栄えていると言ったのが強く印象に残りました。どういう意味だろう。クラブ文化とは何だろうという点がずっと引っかかっていました。その後、毎年オーストラリアに行くようになり、各地のクラブで食事をして、オーストラリアのスポーツ史の研究に何度か、今回が三度目になると思いますが、アプローチすることで、ようやくその疑問の答えにたどり着けた気がします。スポーツクラブは、オーストラリアのクラブ文化の中核に位置します。今日の話のゴールはそこです。新型コロナの感染爆発の中、聖火を掲げてゴールへ進み、人類がコロナに打ち勝った証として、ICUに突進します。

【オーストラリアのフットボール】

さて、オーストラリアで最も人気のある団体競技と言えば、フットボールです。ただし日本人になじみが深いものとしては、ワールドカップ予選

で日本がオーストラリアと鏖むサッカーや、2019年に日本でワールドカップが開催された、いわゆるラグビーを思い浮かべる人が多いと思います。しかし、サッカーとラグビーは、オーストラリアでは、マイナーなフットボールにすぎません。1858年にオーストラリアで生まれたオーストラリアン・ルールズ・フットボール（以下ルールズ省略）が、ニューサウスウェールズ州とクィーンズランド州を除くすべての地域で、最大観客数を誇る人気競技です。その他の二州では、ラグビーリーグと呼ばれる13人制のラグビーが最大の支持を集めています。

歴史家イアン・ターナーは1978年に、二つのスポーツが行われている地域の境界線を、有名なオーストラリアン・フットボールの選手にちなんでバラシ・ラインと名付けました（地図1参照）。この線の東側ではラグビーリーグがシドニーとブリスベンを中心に、西側ではオーストラリアン・フットボールがメルボルン、アデレード、パースを中心に、圧倒的な影響力を持っています。近年、メルボルンを中心としていたオーストラリアン・フットボールが、それに続いてラグビーリーグもこの線を越えて、プレミアリーグの球団を設置しましたが、この勢力図に大きな変化は起こりませんでした。面積では西側がかなり大

きように見えますが、人口の面では東側の比重のほうが大きくなっています。

この二つの競技はオーストラリアで最も高視聴率のテレビ番組でもあります。表1を見てください。2020年のオーストラリアのテレビ視聴率トッ

プテンを示しています。Covid-19の感染の影響を受けたにもかかわらず、1位から3位までをオーストラリアン・フットボールが占め、4、5、9位をラグビーリーグが占めています。この二つがオーストラリアの2大スポーツと言っても差支え



地図1 バラシ・ライン

資料 イアン・ターナーの“1978 Ron Barassi Memorial Lecture”より

表1 2020年オーストラリア高視聴率番組トップ10

1. Seven's AFL: Grand Final: Richmond V Geelong Seven	3,016,000
2. Seven's AFL: Grand Final: Presentations Seven	2,294,000
3. Seven's AFL: Grand Final: On The Ground Seven	2,192,000
4. NRL Grand Final Day -Match Nine	2,106,000
5. State Of Origin Rugby League QLD V NSW 3rd -Match Nine	1,894,000
6. 2020 Australian Open D8 -Night Nine	1,874,000
7. The Block -Winner Announced Nine	1,838,000
8. Lego Masters -Winner Announced Nine	1,692,000
9. State Of Origin Rugby League NSW V QLD 2nd -Match Nine	1,658,000
10. New Year's Eve 2020: Midnight Fireworks ABC TV	1,614,000

資料：mediaweek. (<https://www.mediaweek.com.au/most-watched-programs-of-2020/>) 2021/05/04参照

ないでしょう。

オーストラリアン・フットボールの最大の特徴は、オフサイドがないことです。敵味方それぞれ18人の選手が競技場全体に散らばってプレイします。また、点はゴールポストの間をキックによって通過させることで得られます。ローカルなフットボールが支配的競技なのは、アメリカと同じですが、とても若い国なのにもかかわらず、スポーツを草の根で支えるフットボールクラブの設立という面では、オーストラリアはイギリスと並び、世界で最も長い歴史を持っています。複数のクラブが起源を1850年代から60年代遡ることができません。今日お話しするのは、オーストラリアン・フットボールが始まったヴィクトリア州です。ヴィクトリア州は現在に至るまで、この競技の中心地です。

本題に入る前に、私が考えているスポーツ研究が前提とする枠組みを示しておきます。図1をご覧ください。今日のテーマのオーストラリアン・フットボールの統括団体AFLは、全国リーグを組織して競技を支配しています。ヴィクトリア州のリーグはその下に位置し、さらにヴィクトリア州の地方（カントリー）のフットボールクラブもその傘下に入っています。また、統括団体AFL自身もグローバルなメディア資本の要求によ

て、大きな制約を受けています。ローカル・スポーツを支える地域のスポーツクラブは、この重層的な構造によって、グローバルな資本の動きとも深く結びついて、活動を行っています。今日は、この構造を手短かに説明します。

【オーストラリアン・ルールズ・フットボールの展開】

1858年に、メルボルン・クリケット・クラブ（MCC）の書記だったトム・ウィリスは、クリケットを行えない冬場に肉体を維持するための競技として、フットボールを行うことを提案しました。ウィリスとその仲間、イギリスで行われていた種々のフットボールの要素を組み合わせることで、オーストラリアに適したルールを作り上げます。同年末までには、MCCのメンバーによって、メルボルン・フットボールクラブが設立され、59年にウィリスなどが、オーストラリアン・フットボールのルールを定めました。このルールが書かれた文書が現在もMCCの図書館に保存されていて、フットボールのルールを定めた世界最古の文書だと言われています¹⁾。

メルボルンでは、1861年にはチャレンジカップが創始され、また、郊外のクラブが設立されて、首都圏の対抗戦らしきものが始まりました。ただ

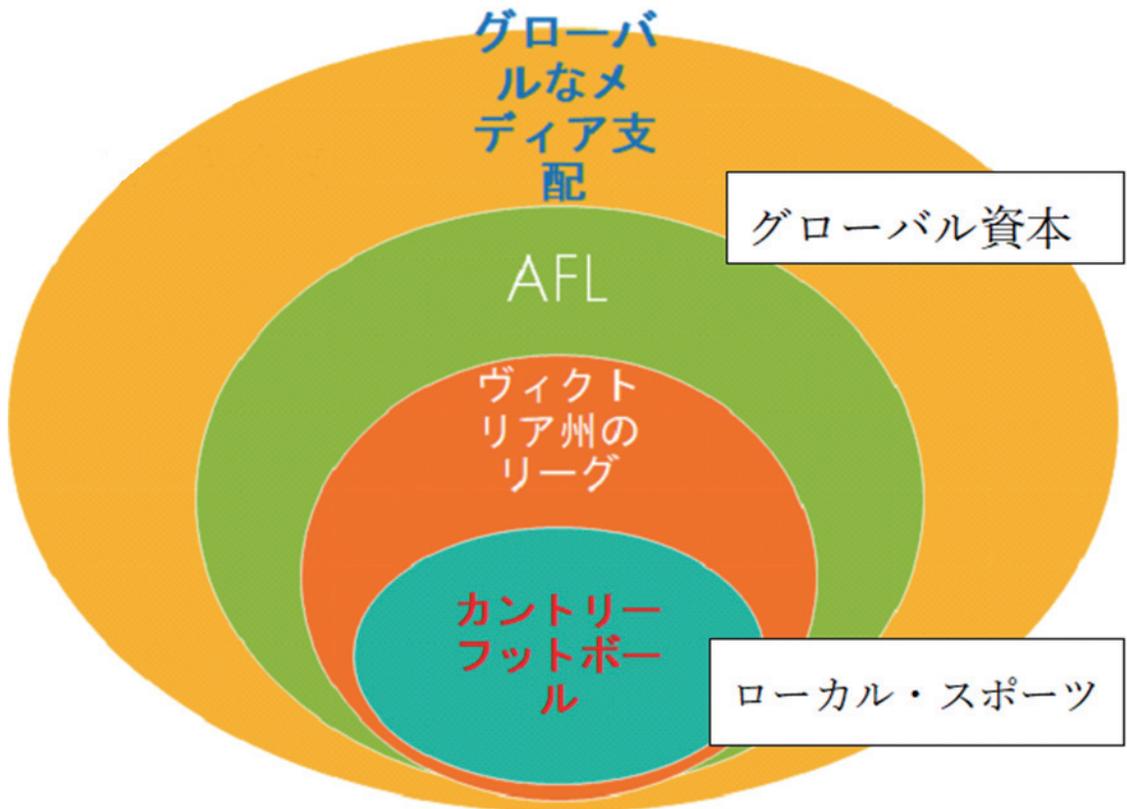


図1 今日の概念図

し、試合は牧歌的なもので、ユーカリの大木にボールが引っかかり、それに石を当てて落ちるまで試合が中断される、というようなアクシデントもありました。ヴィクトリアのカントリー地域では、59年にカースルメイン、60年にバララット、61年にベンディゴウにクラブが設立されました。現存するオーストラリアン・フットボールのクラブでは、それぞれ2番目、4番目、5番目に古く、世界的に見ても、ヴィクトリアのカントリーは、最も古いフットボールクラブの伝統を持つ地域です。学校や職場はフットボールチームの重要な単位でしたが、多くのチームは地域のクラブを基盤としていました。クラブは、1850年代のゴールドラッシュから1890年まで続く好景気を背景に成長を続ける地域コミュニティとともに発展します。

1877年、メルボルンの郊外には少なくとも133

チームが存在していました。そして、この地域の主要なクラブが、競技の統括団体として、ヴィクトリア・フットボール協会（VFA）を設立します。70年代の半ばには鉄道の発達のおかげもあって、主要なカントリータウンにも、フットボールクラブが設立されて、80年代にはメルボルンとカントリーの交流戦が始まります。90年代になると、カントリーにもリーグが結成されました。複数のクラブによるリーグ戦が組織されると、優秀な選手獲得のための競争が起こって、選手に対する金銭の支払いがしばしば見られるようになりました。一方メルボルンでは、主要な試合の観客数が1万を超えましたが、90年代の金融恐慌以後は全般的に観客数が減ります。この時、西オーストラリアで新たにゴールドラッシュが起こると、有力な選手がより良い条件を求めて移住しました。こうしたなか、96年には財政的に豊かな有力8ク

ラブがVFAから離脱して、ヴィクトリア・フットボール連盟（VFL）を設立し、97年からリーグ戦を開始しました。これが今日の統括団体AFLの母体になります。現在の日本のAFLのサイトを見ても、VFAは全く言及されていないので、勝者に都合よく消された前史というところでしょうか。以後、VFLのリーグが優勢ながらも、VFAも併存する状況が長く続きます。

1927年になると、ヴィクトリアン・カンントリー・フットボール・リーグ（VCFL）が結成されました。30年代にはVCFLに属するクラブの数が千に届きますが、これは現在のクラブ数の倍くらいです。第2次世界大戦中には、多くのクラブが機能を停止しましたが、戦後には復活し、50年代まで行われた兵士入植計画などもあり、カンントリー・フットボールは隆盛を極めるようになります。羊毛ブームやミクサマトーシスの導入によるアナウサギの激減が農牧業地帯を豊かにしたことも、その背景にありました。

1980年代に入ると、VFLはヴィクトリア州だけでなく、全国的なリーグとなる方向に進み始めます。83年には、地元のクラブの激しい反対にも

かわらず、サウス・メルボルンをフランチャイズとするチームであったスワンズをシドニー（NSW）に移転させました。さらに、87年にプリズベン（クイーンズランド）とパース（西オーストラリア）のチームがリーグ戦に加わったのを契機に、90年にVFLは旧来の名称のヴィクトリアをオーストラリアに改めて、AFLとなり、オーストラリアン・フットボールを全国的な競技とする方向に本格的に舵を切りました。91年にはアデレード（南オーストラリア）のチームも加わりました。

95年にはそれまで独立を保っていた対抗団体のVFAを吸収し、2012年にはVCFLを傘下に収めました。これによってヴィクトリア州内のオーストラリアン・フットボールがすべて、AFLのもとに完全に統合されました。16年にはAFLはVCFLを解散し、AFLヴィクトリア・カンントリーという下部組織にしました。独立したカンントリー・フットボールの伝統はこれで事実上消滅したのです。現在の構造については図2を見てください。説明は省略します。

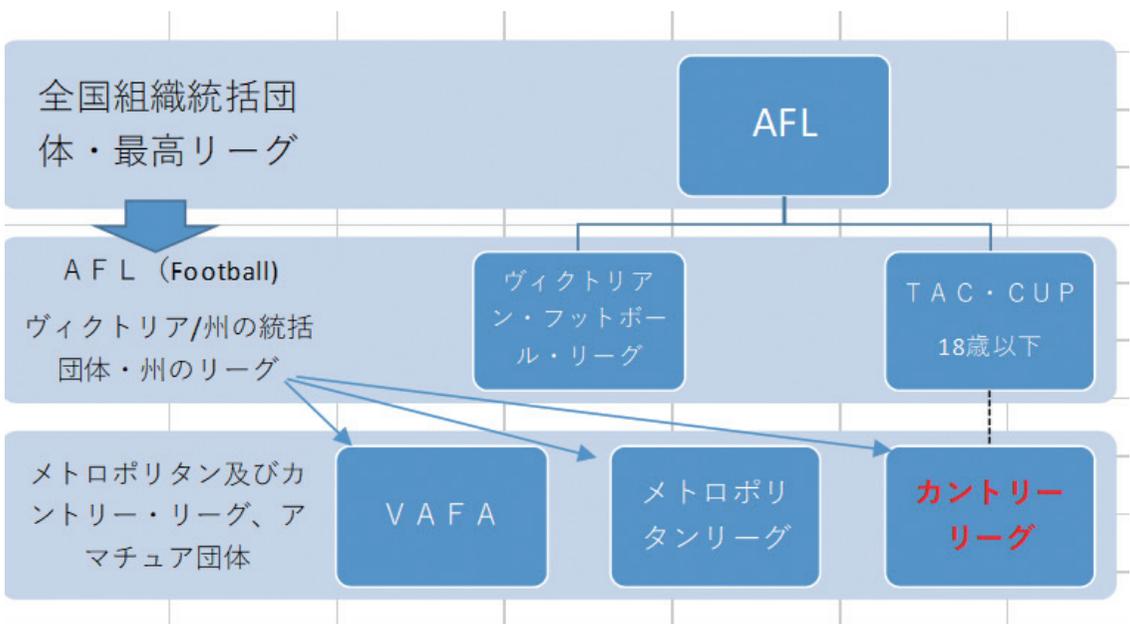


図2 オーストラリアン・フットボールの統括団体及びリーグの構造

[メディア・スポーツ複合体]

以上のようなオーストラリアン・フットボールの近年の変遷の背景には、スポーツと社会の関係の変化、とりわけメディアとの関係の変化が横たわっています。これまで日本では、文化帝国主義、アメリカニゼーション、グローバリゼーションのような国民国家を超えた枠組みでも、スポーツ史の研究は進んできました。それを代表するのが、日本には批判的に受容されたグッドマンの『スポーツと帝国』です。さらにジョゼフ・マグウィアのメディア・スポーツ生産複合体論の提唱。オーストラリアのデイヴィッド・ロウによる、メディア・スポーツ・文化複合概念の提起などにより、メディアによるグローバルなスポーツ支配への関心が高まっています²⁾。アメリカのメディアの要求とIOCに振り回される現在の日本の姿、Covid-19の流行という現実の危機の前で広げられる大根役者による三文芝居の喜劇は、その格好の実例かもしれません。

この変化はグローバルに展開しましたが、オー

ストラリアは単なる受け身の存在ではなく、変化の震源の一つでもありました。オーストラリア出身のメディア王ルーパート・マードックは、イギリスのプレミアリーグ、アメリカのNFLやメジャーリーグ、オーストラリアのラグビーリーグなどの再編に深く関わったことは、つとに知られています。1980年代までに、アメリカではスポーツ番組がカラーコンテンツ化し、スポーツの放映権料が高騰します。オーストラリアの現状が同様なのは、表1からも明らかです。要するに、スポーツの商品化が急速に進んだのです。この巨額の権益をめぐってスポーツ組織とメディアやマーケティング企業の融合が始まります。スポーツは、メディア映えするように演出され、ルールもそれに応じて変更されました。ヨーロッパでも1991年のプレミアリーグ創設から、同様の事態が進行します。90年代からは、国際的なメディア資本や企業が、主要なスポーツ組織やチームを活発に買収し、スポーツ組織の構造が大きく変わって、スポーツクラブの在り方、チームと選

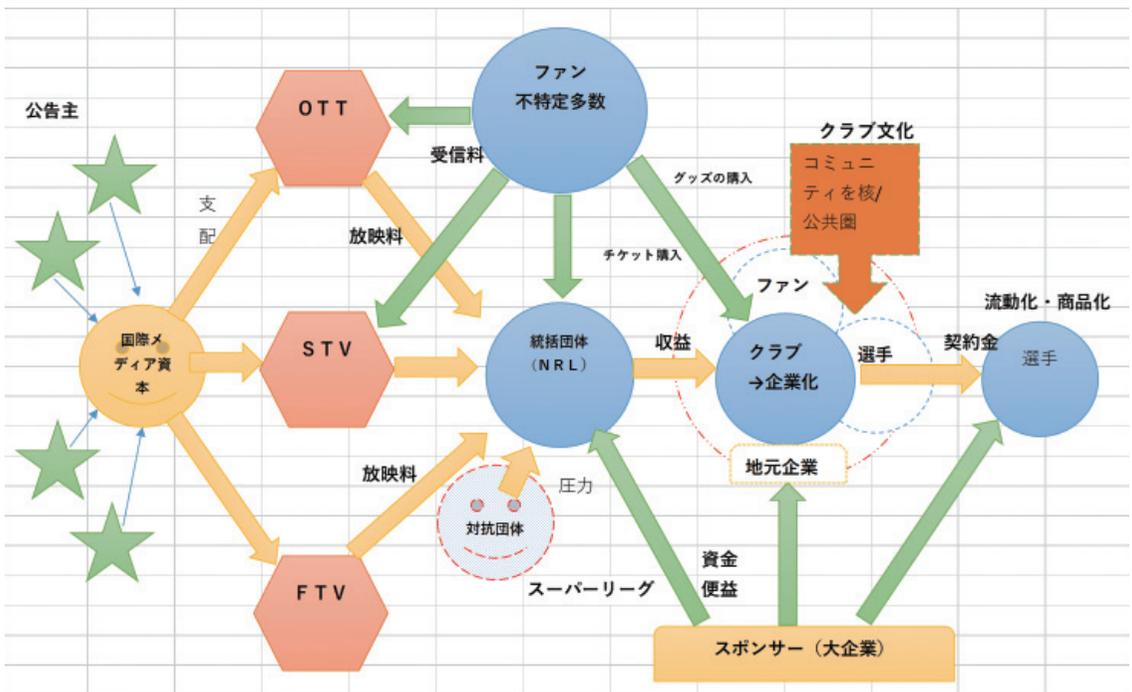


図3 オーストラリアにおけるメディア・スポーツ複合体の構造

手やファンの関係も激変しました。おそらく、このプロセスに最も大きく貢献したのが、マードックなどが率いる国際的なメディア資本です。

もちろんスポーツ組織やファンは、グローバリゼーションの影響を受動的に被るだけではありませんでした。キラーコンテンツであったがゆえに、主体性をかなりの程度まで発揮することができました。有力なクラブは、国際的なメディア資本に対しても強い交渉力を持っていましたし、メディア資本によるチームの買収や消滅に対するファンの抵抗は、グローバル資本の勝手な行動を抑制するのにある程度成功しました。その背景には、スポーツを国民文化の不可欠な要素として守ろうとする政府の動きもありました。1990年代からイギリスをはじめ多くの国が、主要なスポーツの大会の無料放送を法律で義務化しています。

この複雑な状況を理解するには、スポーツ組織、クラブ、メディア、投資家、企業家、広告会社、ファン、政府が織りなす構造を動的に理解するモデルが必要です。

【伝統的構造と新しい構造】

スポーツ社会学の研究者によるモデルは各種提示されてきましたが、具体性に欠け、往々にして現実との照応関係があいまいでした。図3は、マーケティング会社の説明資料を元に作成・改編して、現実にはスポーツを動かしている資本の論理による図に、歴史的経緯をプラスしたもので、オーストラリアのメディア・スポーツ複合体の構造を示しています。スポーツへの過剰な思い入れや純粋な身体表現への憧憬などがなく、現実的で、グローバルvsローカルの2項対立がないだけ、非規範的で、実際の状況を理解するには良いモデルだと思います。

理念型を語るとすれば、かつて主要なリーグに存在し、現在でもカントリー・フットボールに典型的に見られるフットボールは、次のような形で行われていました。フットボールクラブは、地域のコミュニティと一体化し、クラブメンバー（ファン）がクラブを所有し、運営しています。

クラブのチームに所属する選手は、地元コミュニティと密着していて、選手とファンは同じコミュニティの一員として強い絆で結ばれています。地元の企業がクラブとチームのスポンサーとなっていて、クラブと地域のNGOとの関係も緊密です。理想的な状況では、地域コミュニティとクラブが一体となって、ある種の公共圏を形成し、クラブを核とした強固な地域アイデンティティがこれを支えます。クラブの代表者によって統括団体も組織され、統一的なルール設定やリーグの運営が行われます。図3の右側のような感じ です。

ところが、このような状況は、観客数の増加やテレビという新しいメディアの登場によって、スポーツがイベント化するとともに大きく変貌しました。テレビ放映は、コミュニティの外に不特定多数のファンを生み出します。また、テレビ放映が行われている広大な領域をカバーする企業がスポンサーとなることも着実に増加しました。放映される範囲が広がれば広いほど、このプロセスは加速度的に進行します。

一つの大きな転機は、有料のデジタル放送（STV、有料テレビ）の登場です。STVは有料の視聴者獲得のための手段として、キラーコンテンツを独占的に放映するという戦略を採用しました。スポーツは格好のキラーコンテンツとなり、スポーツ組織に莫大な放映権料が支払われるようになりました。STVにとっては、無料のテレビ放送がこれまで生み出してきた不特定多数のファンがターゲットでした。オリンピックと同様に、主要なスポーツクラブや統括団体は、収入の多くを放映権料や大企業スポンサーに依存するようになって、クラブとチームと地域コミュニティの結合は崩壊していきます。莫大な資金を得た有力なクラブは、多額の契約金を払い世界じゅうから選手を雇うようになりました。スポーツ選手は、クラブや地域コミュニティとの関係を失って、商品・労働者・企業家化し、チームの選手は多国籍化しました。新たなメディアの登場は、さらにこうした状況を加速するでしょう。オーヴァーザ・トップ（OTT）と呼ばれるHuluやNetflixの

ようなインターネットを利用した放送の開始によって、キラーコンテンツとしてのスポーツへの需要はさらに大きくなるように思われます。図3の左側がだいたいその状況を示しています。

【カンントリー・フットボール】

こうした変化は、必ずしもオーストラリアン・フットボールを全面的に席卷しているわけではありません。統括団体AFLの運営は独自の経営陣が行っていますが、チームの大部分はいまだにクラブが所有しています。グローバルなメディア資本であっても、簡単にチームの所有権を手に入れることはできません。また、メルボルン首都圏の主要なリーグを除けば、AFLヴィクトリア・カンントリーに属するすべてのリーグとクラブは、わずかな入場料収入をクラブのメンバーの会費とヴォランティア労働、地域の寄付や公的援助で補うことで成り立っているのです。メディア資本が関心を示し、投資する理由がありません。カンントリー・リーグやクラブは、メディアが支配するプレミアリーグへの選手の供給元として注目されるだけで、放置されるばかりです。

カンントリー・フットボールには、2003年の時点でメジャーリーグとディストリクトリーグを合わせて、48のシニアリーグ（現在AFL内では40に減少）がありました。そのうちの47リーグが、女性が担うネットボールのリーグと地域単位で合併しています。地方人口が減少するなかで、フットボールとネットボールのクラブを統合することで、より効率的な運営を図っているのです。

カンントリー・リーグ個々の試合の観客動員数は決して多くはないかもしれませんが、2003年のヴィクトリアのカントリーの人口約50万人に対し、総観客数は約220万人、人口の4倍以上に達していました。ちなみに同年のJ1リーグの総観客数は416万人でした。約18500の企業がスポンサーや取引相手としてリーグやクラブに関与していて、フットボールとネットボールの試合には、選手、クラブメンバー、サポーターとして約34万人が参加していました。文字通りの社会的行事で

す。そのうち選手としては69000人がVCFLに登録していて、カンントリーでの選手としての競技参加率（19-39歳）をメルボルン周辺と比較すると、12%対3%でその比率は4倍に達しています（競技ができる年齢の男性の4人に1人）。

オーストラリアのスポーツを全土で支えてきたクラブ文化、とりわけ地方のスポーツクラブの行方はとても興味深く感じられます。グローバリゼーションのもとで推進される新自由主義政策は、地域経済とコミュニティに打撃を与え、それはスポーツクラブにも及びました。これまでオーストラリアン・フットボールを支えてきた地方のクラブの多くが瀕死の状況にあります。それが今後のスポーツにどのように影響するのか、今後数年は歴史家として、退職後は年老いた好事家の一人として、注意深く見守っていきたいと思います。

【オーストラリアのクラブ文化】

オーストラリアはクラブ文化の国です。2015年、統計上ライセンスを持つクラブは6413あり、1320万人の会員を擁し、人口の半分はクラブの会員でした。実数はおそらくもっと多いと思われます。このうち24%がボウリングクラブ、17%がゴルフクラブ、24%がフットボールなど他のスポーツクラブでした。文化・宗教関係のクラブは4%で、オーストラリアの社会的紐帯は、圧倒的にスポーツの絆が占めています。他に重要なものとしては、15%の退役軍人クラブがありますが、スポーツはオーストラリアのクラブ文化を知るためには、最も重要な要素です。また、日本のオーストラリア研究が、先住民を除いてこれまで無視してきた地方のコミュニティ理解の鍵の一つもここに 있습니다。

注

- 1) オーストラリアン・フットボールの主要な参考文献は以下のとおり: Blainey, Geoffrey, *A Game of Our Own: The*

Origins of Australian Football, 2nd.ed., Melbourne: Black Inc., 2003; Hess, Rob and Bob Stewart ed., *More than a game: an unauthorized history of Australian rules football*, Melbourne: Melbourne University Press, 1998; Hess, Rob, Matthew Nicholson, Bob Stewart and George de Moore, *A National Game: The History of Australian Rules Football*, Melbourne: Viking (Penguin), 2008; Lenkic, Brunette and Rob Hess, *Play on!: the hidden history of Women's Australian Rules Football*, Richmond, Victoria: Echo Publishing, 2016; Pascoe, Robert, *The Winter Game: The Complete History of Australian Football*, Melbourne: Text Publication, 1995; Pennings, Mark, *Origins of Australian Football: Victoria's Early History*, Vols.1-4, Brisbane: Grumpy Monks, 2012-16、この他にも主要文献が多数あり。

- 2) 高津勝、尾崎正峰編『越境するスポーツ：グローバルゼーションとローカリティ』第1章・6章、創文企画、2006年；Maguire, Joseph, 'Sport, Identity Politics, and Globalization: Diminishing Contrasts and Increasing Varieties', *Sociology of Sport Journal*, 11, 398-427, 1994; Rowe, David, *Global media sport : flows, forms and futures*, London: Bloomsbury Academic, 6, 2011.

参考文献

藤川隆男「メディア・スポーツ複合体とオーストラリアのカントリー・フットボールクラブ」『関学西洋史論集』42号、2019年。

質疑応答

<石井>

それでは、みなさん共通に4つ質問をさせていただきます。

質問1：それぞれの専門領域から見たスポーツ史の魅力や難しさ、限界などについて

まず、今回のシンポジストの先生方は、川本先生がイギリス帝国史、高嶋先生が東洋史、藤川先生がオーストラリア史を主なご専門になさっているということで、西洋史や東洋史の立場からスポーツ史を対象にしてこられたと思います。そうしたお立場から見たスポーツ史の魅力や難しさ、あるいは研究対象としての限界などについて、お感じになることがありましたら教えていただきたいと思います。

一般的には歴史学のメインストリームというと、政治史・経済史・法制史などではないかと思えますし、歴史の教科書でもそのような内容が中心です。また、社会史・文化史にもさまざまな対象があると思いますが、たとえばそうしたジャンルと比較して、なにかスポーツ史の特徴のようなものは、ありますでしょうか。

<川本>

社会的にこれほど好き嫌いの振れ幅が大きい対象を扱う歴史研究はあまりないように思います。しかも対象に深い愛着をもっている研究者が圧倒的に多いという点もそうです。類似例として鉄道史が想起されますが、「スポーツが嫌い」と同じレベルで「鉄道が嫌い」という人はあまりいないでしょう。私自身スポーツ好きを自認していますので、必ずしも否定的な面ばかり強調したいわけではありませんが、メインストリームの歴史学との関係を考えるときにこうした特徴がはたして強みなのか足枷なのか、顧慮する必要はあると思います。

<高嶋>

東洋史ではスポーツを扱うということがまだ少

なく、よい研究も多くはありません。ただこのことは、先行研究に縛られず自由に研究を展開できるという点で、必ずしもマイナスというわけではありません。一方、スポーツ史をみても、中国をはじめとする東アジアの研究は少ないように思います。東洋史に対してスポーツ史の存在を認識させるとともに、スポーツ史に対して東洋史の存在を認識させることが、私の課題だと考えています。

スポーツ史の特徴ですか。今回のテーマにもあるように、グローバルな点が真っ先に思い浮かびます。あとは、歴史学からあまり重視されていないことでしょうか。

<藤川>

スポーツは、近代世界において、おそらく最も重要な文化であるにもかかわらず、日本では歴史研究だけではなく、社会学でも、カルチュラル・スタディーズでも、とても軽視されていると思います。その原因の一つは、スポーツの研究が、まさにスポーツの研究に留まっていて、近現代文化とグローバルなシステムを構成している本質的な要素としてのスポーツという視点が欠けているからではないかと思います。

質問2：国や地域を越えた交流史や関係史の素材としての近代スポーツについて

また「グローバル・ヒストリー」を書くことはどのように可能かについて

<石井>

二つ目は、先生方のご研究は、何らかの形で「グローバル・ヒストリー」や「帝国史」、「リージョナル・スタディーズ」のような視座をお持ちかと思います。近代スポーツは国際試合や国際大会、国際組織や国をまたいだ選手の移動など、国や地域を越えた交流史や関係史の格好の素材となる面があると思いますが、この点について何かお考えがあればお聞かせください。

今回とりあげていただいた『スポーツの世界史』は「世界史」を目指しましたが、結果として

はやはり一国史を集めたものにとどまってしまった、という反省が編者のひとりとしてあります。しかし、ではどうやってやるか、書き手はいるか、という、なかなかハードルは高い気がします。スポーツで「グローバル・ヒストリー」を書くことは可能か？可能だとしたら、どのような方法があるか、などについてご意見をお聞かせ願えれば、と思います。

<川本>

報告の最後で述べましたように、「スポーツ移民」は『スポーツの世界史』で私が書き漏らした重要なトピックの一つです。アフリカからのスポーツ移民やスポーツにまつわる人の移動について、その量的分析や社会経済的考察のみならず、文化的側面、心理的側面や家族関係など、さまざまな局面を歴史的に探れば、大きな「移民の歴史」に資する成果がもたらされ、グローバル・ヒストリーの重要な一画を占める可能性があると考えます。

<高嶋>

私は極東大会からスポーツ史研究に入ったので、まさにスポーツの国や地域を越えた交流や関係に興味を引かれてきました。一つ目の質問で答えられなかった点を補足することになりますが、極東大会はフィリピン、中国、日本がおもな参加国でした。この組合せはじつはなかなか見られないもので、スポーツ界に特有のものだったといっただいでしょう。私の関心は、この組合せから、なにか従来の視点では見えないこの地域の歴史が見えてこないかということにありました。一国史云々という点は、私も『スポーツの世界史』の編者のひとりとして痛感しました。極東大会の研究にしても、フィリピン、中国、日本、アメリカなど国別にアクターを設定する限り、グローバルヒストリーというよりは、国際関係史に近いのかもしれない。いま私が重点的に研究している満洲のスポーツは、ナショナルヒストリーでは捉えきれない対象で、それゆえにこれまであまり研究さ

れてこなかったのです。私は地域をずらして考えていますが、ほかにもさまざまなずらし方があるでしょう。スポーツ史こそグローバルヒストリーを書くべきですが、『スポーツの世界史』のような概説書をつくるには、まだまだ研究の蓄積が足りないように思います。

<藤川>

今日の報告が答えですと言いたいのですが、現代スポーツを理解するためには、メディア・スポーツ複合体のグローバルな展開を基礎としなければなりません。別の視点からすると、スポーツ史研究は、資本と情報の移動とグローバル・ヒストリーの最先端に位置する研究領域のはずで、これほど豊かで未開拓な領域は、他にどこをさがしてもありません。また、私がやっている別の分野の手法、デジタル・ヒストリーを実践するのにも、とても恵まれた領域です。

質問3：1990年代以降のスポーツを取り巻く世界とスポーツそのものの変化について

<石井>

三つ目は、1990年代以降のスポーツを取り巻く世界とスポーツそのものの変化についてです。パワーポイントに示しましたとおり、1990年以降、衛星放送メディアとインターネットの発達によって、スポーツは新たな歴史的フェーズに入ったのではないかと私は思います。これは先生方のご専門とは違う話なので、もしこの点について何かあれば結構です。藤川さんには、すでに現代までをメディア・スポーツ複合体として俯瞰していたでいてるので、川本さん、高嶋さんにお聞きします。

<川本>

報告で述べたケニアのやり投げでは、ユーチューブでの独学から始めたJ・イエゴが2010年代に世界の頂点に立ちました。私が近年でがけているローンボウルズは、日本では極端に知名度が低く専用競技場も大都市圏に数か所しかありませ

んが、高知にいてもインターネットを通して海外での試合のライブ・録画やコーチング資料動画にアクセスできます。スポーツのありかた、その取り組み方は画期的に変化しつつあると考えます。他方でe-スポーツが日本国内で急速に認知度を高めた背景にサッカー競技団体の直接的な関与があるように、「資金力と人的ネットワークがモノを言う」実態は変わらないようにも思えます。

<高嶋>

私は冷戦以前と以後で、スポーツはずいぶん変化しているように思っています。それがメディアのような技術的な変化とどうリンクするかはわかりませんが、既存の秩序が流動化していく状況と呼応している気がします。

質問4：日本のスポーツ史研究における外国史研究の減少について

<石井>

最後は少し生々しい話になりますが、外国史研究の現状について、先生方が感じておられることをお聞かせいただければと思います。今回の学会大会の発表題目を見てもそうですが、近年の日本のスポーツ史研究に、外国史研究がかなり減ったという印象を持っております。特に若手の研究者で、外国史を志す人が減ってきているのではないかと。かつてはイギリスやアメリカはもちろん、クーベルタンの研究やトゥルネンの研究は比較的やっている人が多かった気がするのですが、最近は日本を対象にしている人が非常に多いと思います。そうなると、近い将来、日本で外国のスポーツについて書ける人がいなくなってしまうのではないかと心配もあります。

背景としては、外国がより身近になって、海外に「憧れ」を持つ人が減ったような気がします。大学院生が置かれている現実もあるように思います。修士課程からいわゆる「業績」を求められることも多いため、じっくりと語学や外国語の基礎文献の購読に取り組む時間が、なかなか取れないからではないか、と思ったりもします。この

点について、先生方がご指導されている中で、何かお感じになっていることがあれば、お聞きしたいと思います。

<川本>

大学院生を指導していないので印象論しか申し上げられませんが、石井先生がおっしゃるとおり、より早く「業績」を求められる現状は外国スポーツ史減少の主たる要因の一つでしょう。他方で、メインストリームの外国史研究もまた同様の問題に直面しているように思われます。歴史学の他ジャンル、ひいては人文科学や社会科学の諸分野との連携も模索しながら、スポーツ史への関心を掘り起こしていく試みが打開策のひとつとなるのではないかと考えます。

<高嶋>

私はスポーツ史の教育に携わっているわけではないのでなんとも言えません。文学部の歴史系ということでいえば、日本史に学生が集まり、次に西洋史、そして東洋史はわずかという傾向はずっとあるように思います。外国語ということでは、横文字より漢字へのアレルギーが強いようにも感じます。最近では中国人留学生が激増しているので、むしろ学生が多くて困っているのが正直なところですが、日本人学生、とりわけ大学院に進む日本人学生が少ないのは残念に思っています。もっとも、研究職への就職状況を考えると、ウェルカムというわけにはいきませんが。

<藤川>

大阪大学の文学部でも日本に関する研究をする学生が多数を占めています。幸い西洋史だけは、ほぼ唯一だと思えますが、高い水準で学生数を毎年確保していますが、この先のことは心配しています。デジタル・ヒストリーのような最新の研究手法を教えたり、メディア・スポーツ複合体のような身近で、魅力的なグローバルなコンテンツに触れさせたりすることが大切だと感じています。が、ちょっと後のことは心配です。

最後に感想ですが、池田先生のような厳しい質問を受けると、研究をやっているな、という充実感を感じますし、坂上先生のように、報告を物語のように全体として理解していただくと、谷川さんや亡くなられた川島さんの前で報告した時のような満足感を感じました。

まとめにかえて

<石井>

私は、スポーツを専門とする学部で「スポーツ史」を教えるという、大変ありがたい環境に恵まれてきましたが、その間ずっと悩んできたことがあります。「スポーツ史」とは、なにを研究し、また教える分野なのか、ということです。「大学でスポーツを専門に学んで、歴史の授業も受講しました」という人が身に着けるべき知識とは、どのようなものであるべきなのか。「スポーツ科学部」のようなところで講義される「スポーツ史」は、何を教えれば良いのか。私の勤務先の場合、体育教員になる人はとても少なく、一般企業等に就職する人が大半です。また、じっさいにスポーツ・ビジネスに携わっている社会人向けに講義をすることもあります。そのような人たちにとって、スポーツの歴史を学ぶ意味を、どのように作り出せば良いのか。たいへん僭越な言い方になってしまいましたが、しかし講義をするたびに何か自己不全感のようなものに苛まれてきました。

スポーツを専門に学ぶわけではない人にとっても、このことは同様と思います。「スポーツ史」は、高校までに体育の授業でも歴史の授業でも、ほとんど教わることはないでしょうし、社会に出ても、そのような知識がどうしても必要になる場面は、あまりないのではないのでしょうか。しかしいっぽうで、スポーツというものに対する社会的な関心はますます高まっているようにも感じますし、じっさい選手や指導者以外でも、スポーツに関わる職業に就きたいと考えている若者はかなりいると思います。そのような人たちが学ぶと良いスポーツの歴史とは、どのようなものか。またそれを高校までの勉強と、ある程度関連づけ

て、体系的に教えるとしたら、どのようなことが可能か。そうしたことは今でも考え続けているところです。

奇しくも、高校では「歴史総合」が始まります。いろいろと賛否両論あるとは思いますが、ここでは18世紀後半頃から近代世界の成立として扱われ、「近代化と私たち」、「国際秩序の変化や大衆化と私たち」、「グローバル化と私たち」が3つの大きな枠組みとして設定され、関係史や交流史、同時代性などが重視されるようです。そうになると、そのような学習の延長に「スポーツの世界史」を位置づけて授業を行えば、これはたんにスポーツの問題を越えて、世界に広まった、ある共通文化としての「近代スポーツと私たち」の歴史として、ひとつのテーマ・スタディとして大きな価値を持つのではないかと、思っております。また、そのような切り口にすれば、高校までの勉強とも上手く接続できて、受け入れやすいものになるのではないかと、考えているところです。

質問の1~4は、すべてこのような背景がどこか頭にあって、お聞きしました。質問1は、歴史学を専門としてきた人から見ると、スポーツ史というものは、どのような価値や面白さを持つのか。そこに、もともとスポーツ史だけをやってきた人間では気づけなかった面白さや留意すべき点があるのではないかと、そのための示唆を得たいと思ひ質問させていただいた次第です。

川本さんのおっしゃるとおり、研究の対象それ自体が好きか嫌いか、というのは、ふつうはあまり問題にならないと思います。スポーツ史の研究者は、研究対象である競技の経験者や実践家であることも多く、それゆえ場合によっては過剰な愛着が前提となっていたり、反対にルサンチマンのようなものが背景にあったりと、対象との距離の取り方が難しいと思ひました。いっぽう、高嶋さんと藤川さんが指摘されたとおりに、スポーツ史研究は魅力的かつ依然未開拓の部分も多い領域で、「近代世界において、おそらく最も重要な文化」であるにもかかわらず、たしかに「とても軽視されて」きたジャンルです。じっさい、高校の歴史

の教科書にはスポーツの話はほとんど出てきません。だからこそ逆に、「先行研究に縛られず自由に研究を展開できる」(高嶋報告)のであり、スポーツの研究を、スポーツ研究の枠に留まることなく、近現代文化とグローバルなシステムを構成している本質的な要素として見る(藤川報告)ことで、大きな飛躍が期待できると思いました。

質問2も、同様の趣旨でした。「近代スポーツの世界化」というテーマで「グローバル・ヒストリー」を志向すれば、たとえば先にあげた「スポーツ史」の授業も、とても魅力的で有益なものにできるのではないかと思ったので、ご質問しました。

これを最も実践してこられたのは高嶋さんだと思いますが、極東大会から「フィリピン、中国、日本」という、政治や経済の枠組みでは見えてこない組み合わせを見ることで、「従来の視点では見えないこの地域の歴史が見えてこないか」という考えをお持ちだったと聞き、「なるほどそうだったのか」と思いました。また、満洲のスポーツを、ナショナルヒストリーでは捉えきれない対象として見るという視点、その際に「地域をずらして考え」という、「ずらし方」という高嶋さんの表現は、とても印象的でした。

質問3は、ではそのような研究を、現在のスポーツ界の状況を理解することにつながるには、どうしたら良いか、という観点からうかがわせていただいたものです。「歴史は現在とどのように関わっているのか」ということで、近代スポーツの言うなれば「長い近代」は、どこまでなのか、とか、それは現在と、どこかで切れているのか、いままでずっと続いているのか、などについてのご示唆をいただきたいと思いました。

私は「スポーツの伝播史」という観点からスポーツ史に入りましたが、それはいま考えると人の移動や交流の歴史でもあります。その意味で川本さんが第2の質問への答えのなかで触れられた「スポーツ移民」というテーマは、人類学とも共有可能な大きな可能性を持ち、現代社会の状況とも直接つながる今日的なテーマであると感じまし

た(日本の文化人類学者によるスポーツ移民研究としては、たとえば窪田暁『「野球移民」を生みだす人びと：ドミニカ共和国とアメリカにまたがる扶養義務のネットワーク』、清水弘文堂書房、2016年などがある)。

2つ目と3つ目の質問については、藤川報告がその答えだったとも言えると思います。現代スポーツを理解するためには、メディア・スポーツ複合体のグローバルな展開を基礎としなければならない、というご指摘には強く同意いたします。「スポーツ史研究は、資本と情報の移動というグローバル・ヒストリーの最先端に位置する研究領域のはず」というのもとても納得で、それが現代では、川本報告にあったケニアのやり投げ選手が、ユーチューブで独学から始めて世界チャンピオンになるという事態を生んだり、大都市圏ですら数か所しか専用競技場のないローンボウルズが、高知にいてもインターネットを通して海外での試合のライブ・録画やコーチング資料動画にアクセスでき実践されているという状況を生んでいる。あるいは、その情報のリソースが海外の別な小規模地域から発信されたものだったりもする、ということが日常的に起きているように思います。

現代史という点で言うと、「冷戦以前と以後で、スポーツはずいぶん変化しているように思っています」という高嶋さんのお答えには、私もまったく同感です。とりわけ1990年代に入り、スポーツは現在に直接つながる新たな時代に入ったのではないかと考えます。これには衛星放送テレビとインターネットが世界的に普及したことが前提となっていると思います。特に、初期のペイパー・ビュー放送にとって、製作コストが安く、言語を解さなくても理解できるスポーツは、新興のグローバル・メディアにとってうってつけのコンテンツであったのだと思います。

質問4は、あまりに現実的な話になってしまいましたが、特に「グローバル・ヒストリーとしてのスポーツ史」のような壮大な構想を形にするためには、やはり「競技人口」が多くないと実現し

ないと思うので、ほかの分野ではどうなのだろうか？という素朴な関心からお聞きしたものです。

『スポーツの世界史』のような本を10年後、20年後にも出すとしたら、その執筆陣は、いま若手としてすでに研究をスタートさせている必要がある。しかし、日本や英語圏はともかくとして、それ以外の国や地域のスポーツ史研究を志す人がどんどん減っているように感じます。その辺の危機感、他の歴史学の分野ではどうなのだろうかと思、お聞きした次第です。

お三方のお答えから感じたのは、危機感はある程度共通しているが、あまり悲観していてもいけない、ということでした。大阪大学では、高い水準で学生数を毎年確保しておられるということで、藤川さんはじめ多くの先生方のお力のゆえと思うと同時に、私が言うことではないですが、ちょっとほっとしました。いっぽうで、京大ですら「横文字より漢字へのアレルギーが強い」というのは、意外でした。

いずれにしても、現状にあわせて努力しなければならぬわけで、川本さんのおっしゃった「歴史学の他ジャンル、ひいては人文科学や社会科学の諸分野との連携も模索しながら、スポーツ史への関心を掘り起こしていく試みが打開策のひとつとなる」という展望は、今後さらに意識していこうと思います（たとえば以下は、歴史学と人類学、社会学を架橋するスポーツ研究の一例と言えよう。ニコ・ベズニエ他、川島浩平他（訳）『スポーツ人類学：グローバリゼーションと身体』、共和国、2020年）。また、藤川さんの、デジタル・ヒストリーやメディア・スポーツ複合体のようなコンテンツを取り入れる、という方法も、さっそく見習わせていただきたいと思いました。特に私のところではスポーツ・ビジネスやデジタル技術に関心の高い学生が非常に多いので、これはとても有効だと思います。

以上、「スポーツの世界史を考える—文明化の使命、帝国主義、ポストコロニアルの視点から—」から出発して、最後はグローバル・ヒストリーとしてのスポーツ史の可能性へと話が広がりま

した。シンポジストの先生方からは、いずれも簡にして要を得たお答えをいただき、たいへん勉強になりました。

最後に、高嶋さんの「スポーツ史こそグローバル・ヒストリーを書くべきですが、『スポーツの世界史』のような概説書をつくるには、まだまだ研究の蓄積が足りないように思います」という言葉を引かせていただきまして、今後もさまざまな研究が蓄積され、やがてそれらが総合されて、さらなる「スポーツの世界史」が書かれることを願って、むすびとさせていただきますと思います。みなさま本当に、ありがとうございました。

シンポジウム報告 編集後記

本シンポジウム報告は、学会大会終了後、登壇者のみなさまにあらためて原稿の執筆を依頼し、編集したものです。本来ならば、録音、文字起こしによって当日の発表および議論を収録するべきところでしたが、大会事務局の認識不足と不手際によってこのような形とせざるを得なくなりました。現在はzoomでの学会で発表を録画することは当然のようになっていますが、当時はまだオンライン学会の経験も少なく、録画をするためにためらいがあったことも理由の一つです。当日、フロアからもいくつかのご発言をいただきましたが、すべての質問と応答を再現することは難しいと判断し、こちらは載録を断念いたしました。ご発言をいただいた先生方をはじめ学会員のみなさまに深くお詫び申し上げます。

シンポジストの川本先生、高嶋先生、藤川先生には当日の発表内容を再現していただきながら、必要に応じて補足をしていただきました。コーディネーターの石井先生には、当日お話しいただいたことに加え、あらためての論点整理や今後に向けての問題提起などをしていただきました。本稿は当日のお話をそのまま記録したものとはなっていませんが、ご登壇いただいたみなさまのご協力により充実した内容となりました。執筆の依頼に快く応じていただいた先生方にあらためて感謝申し上げます。（第34回学会大会事務局 佐々木 浩雄）